

うるし年表

箕輪漆行

菱輪圭二

2024.1.作成

参考文献

- ・日本漆工の研究
- ・日本の漆
- ・日本漆工協会
- ・郷土史往来
- ・今立町史
- ・漆を科学する会資料

縄文時代 草創期 12600年前	漆の木片	2012年鳥浜貝塚で過去に発見された木片が漆の木である事がわかった。
縄文時代 早期 9000年前	世界最古の漆塗	2000年函館市垣ノ島B遺跡で漆を塗った糸で作った装飾品が出土 世界最古の漆塗 只、その後2002年に火災で焼失。
長江文明 7000年前	河姆渡遺跡	1973年に中国浙江省余姚県で赤色漆塗木椀や弓矢が出土 当時は世界最古の漆塗。
縄文時代 前期 6000年前	朱塗の櫛	1960～1980年にかけて鳥浜貝塚より発見された品の一つ 当時世界最古 それまでの認識を覆し高度な漆工技術があった事が証明された。
2000年前	楽浪遺跡（漆器）	朝鮮平壤付近 戦前日本人によって発掘調査が行われた 大量の漆器が出て楽浪漆器と言うが生産は中国四川省。金銀、平脱、螺鈿など高度な技法である。
1500年前	越前漆器	継体天皇が皇子の頃に御冠の塗替を片山町の塗師に命じた。
飛鳥時代 592～710年	阿修羅像 玉虫の厨子	国宝 脱乾漆造 興福寺蔵。 国宝飛鳥時代を代表する漆工芸品 透し金具の下に玉虫の羽根を敷き詰めていた為にこの名がついた 現在はほとんど剥落している 法隆寺蔵。
奈良時代 710～784年	末金鏤	蒔絵の始まり ヤスリでおろした大小混合の金粉を蒔きつけた研ぎ出し蒔絵が特徴 金銀鈿荘唐太刀 正倉院蔵。
奈良時代 710～784年	漆工芸の基礎確立	奈良時代に螺鈿、平脱、漆皮、脱乾漆、蒔絵の技法がほぼ確立する。
平安中期 794～1185年	漆を正税とする	延喜式に越前、加賀、越中、越後の四ヶ国は漆の主産地なれば正税として・・・
平安中期 794～1185年	惟喬親王	文徳天皇の第一子、漆や漆器の製法が確立しない事を嘆き、京都法輪寺で参籠され虚空蔵菩薩より御伝授御教示を受けて完成し日本国中広めたといわれており、満願の日が11月13日である 昭和60年この日を日本漆工協会は漆の日に制定した。
平安時代 794～1185年	平安の雅	沃懸地や蒔絵、螺鈿など貴族を中心に豪華絢爛な雅な漆工芸が開花。宇治平等院、平泉中尊寺などが代表的。
鎌倉時代 1185～1336年	堆朱、沈金の伝来	宋、元の貿易で堆朱と沈金の技法が伝来。
室町時代 1567年	御祝儀の御樽、着作法	永禄10年織田信長の長男信忠と武田信玄の娘お松の婚約が成って、武田家より漆千桶、蠟燭3千張、熊の皮千枚、御馬拾一疋贈った。
鎌倉～桃山時代	根来塗	紀州根来寺の僧侶が漆器を製作していた 黒中塗の上に朱漆で上塗したもの。 根来寺は約400年前、秀吉の紀州攻めで滅亡。多くの僧侶は方々に落延び、漆塗りを始める。
桃山時代 1568～1600年	金継ぎ	大阪、堺で起こったとされる 中国の金継ぎはカスガイで止める。
桃山時代 1568～1600年	高台寺蒔絵	京都高台寺の秀吉と高台院（ねね）霊屋内を装飾した蒔絵と二人の遺品に施された蒔絵。 内陣をはじめ平蒔絵、針描、絵梨地を多用しているのが特徴 比較的手間をかけず華やかな印象を与える。
江戸時代	中国産漆密輸入	享保年間1650～1736年中国産漆が密輸入された。
江戸時代	タイ産漆輸入	享保年間1716～1736年、長崎出島でオランダ商館がタイ産漆を取扱っていた 当時、日本産漆の相場の数倍していた。
15-17C	輸出漆器	ポルトガル、スペインへ漆工芸品が大量に輸出された この漆工芸品をヨーロッパではジャパンと呼んだ。
江戸時代 約330年前	漆掻き鎌の発明	越前市栗田部の鍛冶春田惣兵衛（1704年没）が創意工夫し作った 複雑な形状のため一門以外、50年ほど前までだれも作られなかった。
幕末	幕藩体制の崩壊	武具の需要やパトロンを失った漆工界は急激に失速する。
明治7年	ニール号沈没	ウイーン万博に出品した漆工芸品が伊豆沖で座礁沈没した 一年半後引き上げられ損傷が全くなく日本の漆工芸の堅牢であることが証明された。その為、翌年のフィラデルフィア万博に再出品され大絶賛された。
明治10年	中国産漆輸入	大阪の中国商人より輸入する、油分が25%以上混合され品質は悪かった。
明治18年	日本の特許第一号	堀田瑞松（日本化工塗料KK）が船底の防錆、防汚の機能を持つ「堀田錆止塗料」である 生漆を主成分とし、鉄粉、鉛丹、油煤、柿渋等が配合されている。登録された8月14日が専売特許の日に制定されている。
明治30年代	色漆の発明	当時、朱、黒、黄、青、うるみの5色しかなかった色漆を 六角紫水、三山喜三郎らの研究により多彩な色が作り出された。
昭和元年～5年	朝鮮、台湾に漆植樹	国策として朝鮮半島に日本の漆苗を植樹 漆掻き技法も伝える 現在に致る。 台湾には斎藤KKが安南漆を植樹する。昭和50年代台風で壊滅的被害。
昭和5年	全国漆商連合会	第1回大会が名古屋で開催、結成が可決される。今後隔年ごとに開催することが申し合わされた。 組合長 宇佐美与一郎（名古屋漆商組合）第2回大会は123名参加（写真有）
昭和7～15年	漆の種関連の特許	漆の実より栄養剤を製造する方法（昭和7年）、漆の種子より滋養強壮剤を製造する方法（昭和8年）、コーヒー代用品製造法（昭和15年）
昭和11年	漆の最大消費	中国産輸入量2,094 t、日本産44 t 合計2,138 tである。
昭和15年	日本漆器組合連合会	物価統制令に基づく公定価格認可申請のため結成、現在16組合で構成。
昭和15～26年	統制物資になる	戦時中漆は統制物資となり、主に軍需品に使われる。
昭和23年	日本漆工協会	昭和23年設立 会報誌発行 現理事長に玉川義孝。
昭和25年	文化財保護法	無形文化財（漆芸技術もその一つ）のうち価値の高いものを国が保護、助成する制度。 工芸は日展工芸（山崎覚太郎）から日本工芸会（松田権六）が分派する。 日展の最高位は芸術院会員、日本工芸会は人間国宝であり、松田権六は両方で認定された。
昭和33年	長崎国旗事件	長崎市のデパートで中国切手、切り紙展覧会が催された。右翼団体の男が中国国旗をひきずり降ろし毀損した。これに激怒した中国は漆の輸出を33、34年停止した。漆関連業界は大パニックに陥る。代用品としてカシューが使われはじめた。

※文献によって年代、内容が若干違う事があります。ご了承ください。